２０１８．１．２０　大草

読書メモ

78．久保田正文「日蓮　その生涯と思想」講談社現代新書（1967.12）

**＜久保田正文「日蓮　その生涯と思想」から＞**

・法華経に帰依するとは、「心の建て直し」をせよということ。今までは世俗的な地位、財産、名誉、権力を得るのが人生の目標であったが、それらよりもっと高く貴いものがあることに気づく。自分の人格の完成、即ち成仏を目的として進むようになれば、「三界」（①欲界、②色界、③無色界）は、衰えることのない仏国となる。

①欲界とは、欲望によって生きて行く世界

②色界とは、身体に左右されて生きている世界

③無色界とは、精神生活をする世界

・法難になぜ遭うか。法華経第５の巻第１３章に予言されている。法華経を広めることで法難に遭うことは悦びである。大難出来すとも、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ等と誓いし願破るべからず。誘惑（南無阿弥陀仏と唱えれば極楽に行けるとの）や脅迫（親を殺すとの）に負けず、法華経を捨てず信仰する日蓮は、自分のためでなく、弟子のため、民のため、模範となった。

・仏法を世に広める二つの姿勢。①接受（相手の立場を認め、平和的関係のうちに仏法の大義を説く）方法と②折伏（平和が破られても、相手の不完全さを自覚させ、完全な道へ導き入れる方法がある。

・法華経第１６章　如来寿量品：久遠の本仏と人間の関係を比喩で示している。

・今は、捨て身覚悟で他宗を折伏するという布教方法をとり、法華経を世に広める道を開くべき。日蓮は、どのような迫害もものともせず、佐渡流刑もこの世の小ささな苦しみであるから嘆き悲しむことはしない。流刑によって、仏と成るもとを作っている。後生には法の境涯に入るという法楽を受けることは確実であるから苦しみはない。喜ばしい。

・日蓮の書いた曼荼羅には、妙法蓮華経を中心に下は地獄界から上は仏界までの十界が書かれている。十界（①地獄　②餓鬼　③畜生　④修羅　⑤人間　⑥天上　⑦声聞　⑧縁覚

⑨菩薩　⑩仏）とは、人間の心の中の諸相であるという。この曼荼羅には天照大神、八幡大菩薩と記され、その下に日蓮と書かれている。これは法華経が世界に広まることを象徴しており、その責任を日蓮が負うとの意である。

・南無とは帰依のこと。南無妙法蓮華経と唱えることは、身に行い、口に唱え、意（こころ）に思うこと。その意は、釈迦牟尼如来の意であり、身も意も釈迦牟尼如来に従うとの意味である。この釈迦牟尼如来とは、歴史上の釈尊となって現れた本体である「久遠実成本師釈迦牟尼仏」をいう。

・日蓮は、南無妙法蓮華経を唱えることが正行であり、経典を読みその他の行事をすることは助行であるという。このお経を広めるのが、この本仏の使いである日蓮の使命であった。

・無上道とは。無上道とは、法華経第16章如来寿量品の結びの言葉である。本仏は、「毎（つね）に自ら是の念をなす。何をもってか衆生をして無上道に入り、速やかに仏身を成就することを得しめん」とあり、これが本仏の本願であるという。この南無妙法連華経の題目を唱える道は、必ず仏の境地に到達できる最高の道である。

以上

＜閑話休題＞

「日本文化をよむ」藤田正勝より

世阿弥６６歳「拾玉得花」

「抑も（そもそも）花とは咲くによりて面白く、散るによりてめづらしき也。ある人問いて曰く「如何なるか、無常心」。答ふ、「飛花落葉」。

又問ふ、「如何なるか常住不滅」。答ふ、「飛花落葉」　云々」

シェークスピア

「君、時というものは、それぞれの人間によって、それぞれの速さで走るものだよ」

ラッセル

「幸福な人とは、客観的な生き方をし、自由な愛情と広い興味を持っている人である」

ラフカディオハーンＶ（海から富士山を眺めている描写が素晴らしい！！）

「すると力強い山頂が、いま明けなんとする日の光の赤らみの中で、まるで不可思議な夢幻の蓮の花の蕾のように薄紅に染まっているのが見えた。その光景を目にし、皆は心打たれて押し黙った。永遠の雪は黄ばんだかと見るや黄金へと色を変じ、太陽の光線がその山頂に達するやさらに白色に変じた。日の光は地球の曲線の上を横切り、影深い山脈の上を横切り、また星々の上をも横切ってきたかのようであった。」

平川祐弘「日本の生きる道」から

「清らかさを尊ぶ神道の心が、衛生を尊ぶ思想の背景にあったのではあるまいか。」（台湾統治において衛生面を重んじた政策に関してのコメント）

おしまい　おしまい